

書評 Donald L. Donham, Marxist Modern: An Ethnographic History of the Ethiopian Revolution

著者	増田 研
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	42
号	6
ページ	89-92
発行年	2001-06
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007989

Donald L. Donham,

Marxist Modern: An Ethnographic History of the Ethiopian Revolution.

Berkeley: University of California Press,
1999, xxiv+236pp.

ます だ けん
増 田 研

I

本書は、エチオピア南部のオモ(Omo)系農耕社会マーレ(Maale)と社会主義国家エチオピア(1974-91年)との関係を、〈近代〉をキーワードとして解明しようとする意欲作である。まずは本書が生み出された背景について述べておこう。

現在、エチオピアの人類学的研究には、周辺社会としてのフィールドと中心としての国家との関係を、歴史に配慮した動態として描くことが要請されるようになっている。そこには中心としての国家王朝史を歴史学者が担当し、周辺の「歴史のない」社会を人類学者が担当するという従来の学問的分業体制(あるいはアカデミックな中心/周辺関係)を超えようとする意図がある。政治学者クラファムも指摘するように「近年はむしろ……多くの研究がネイション・ビルディングと征服の過程を周辺社会から照射し、いわゆるエチオピア史にたいする修正主義的アプローチを仕掛けるようになっている」のである[Clapham 1993, 118]。本書の著者ドナルド・ダナムは、そうしたエチオピア歴史人類学の旗手と目されている。

ダナムは1970年代初頭よりマーレにおける文化人類学的フィールドワークを開始し、79年には博士論文を提出している[Donham 1985]。現在の彼の仕事を方向づけた特別な事件があったとすれば、この最初の調査期間中、まさにフィールド滞在のさなかにあの革命が成し遂げられたということだろう。たと

えば1975年7月8日、ダナムは革命思想普及のために派遣されたエチオピア人学生たちから、「アメリカの帝国主義者」、「CIAの手先」と難癖をつけられ、その後の劇的な社会変化を目の当たりにすることになるのである。

ダナムその人も、マルクス主義にきわめて深い関心を寄せる人類学者である。とくに Donham (1990) は人類学とマルクス主義との関係を理論的に考察したものであり、歴史哲学あるいは批判理論としてのマルクス主義を自らの課題とする、彼のマニフェストとなっている。

こうしたダナムの目には、マルクス主義あるいはマルクス＝レーニン主義に基づいた国家運営を標榜しながら、その一方で暴虐のかぎりをつくしたメンギスツ政権下のエチオピアは、きわめて肩唾物の、似非社会主義国家と映ったに違いない。そのダナムが、満を持して発表したのが本書 Marxist Modern である。

II

本書の章立ては、ローカルとセンターを往復しており、本書がミクロな枠組み(周辺社会としてのマーレ)とマクロな枠組み(中心としての国家とそれを超えるもの)の接合を目指していることは明らかである。

序章「近代と反近代の系譜学」では、エチオピアのマルクス主義をどのように理解すべきなのかという課題が提出され、その解明のための鍵としてエチオピアにおける〈近代〉的なもの、特に地域社会において受容された〈近代〉の理解の重要性が強調される。

第1章「エチオピアにおける近代のメタ・ナラティブ、1974年」では、1974年からの革命の経緯が紹介される。ダナムによれば、ハイレセラシエ体制が打倒され、革命が進行していく過程で、従来の帝政が「アメリカ」および「資本主義」といった項目と結びつけられて〈後進的〉なるものとして括られ、ソビエト的なマルクス＝レーニン主義と〈近代〉が結びつけられて絶対化される語りのスタイルが定着

した。

第2章「マーレの神聖王と革命キャンペーン」および第3章「マーレにおける伝統回帰としての革命」では、マーレ社会における革命の影響が報告される。マーレ社会は伝統的には一人の王のもとに領土が分割され、それぞれの領土を首長が統括する王制社会（人類学的な分類に従えば、むしろ首長制社会と呼ぶ方が適切であろう）であったが、19世紀末にエチオピア帝国に取り込まれ、王や首長も国家組織の末端として再定義された。1950年代からマーレ社会でも増加していた福音派キリスト教徒たちは、そのようなマーレのあり方に不満を抱くようになり、75年に革命思想普及キャンペーンがマーレに届くようになると積極的に革命運動に参加していった。その一方で、帝政が打倒されたことで、本来の、真のマーレ文化の再興（すなわち神聖王権の復活）を求める伝統主義者の台頭もあり、マーレ社会の情勢は政治的に緊迫していった。

第4章「北米福音派ミッションにおける近代の弁証法」は、マーレ社会と〈近代〉の関係を理解するために不可欠な、北米の福音派ミッション団体SIM（かつてはSudan Interior Missionの名で活動していたが、現在はSociety for International Ministriesと改称している）のエチオピアにおける活動を紹介している。

第5章「マーレにおける改宗の文化的構築」では前章を受けて、主に革命前のSIMとマーレとの関係について述べ、多くのマーレ人がキリスト教に改宗していった背景を探っている。

第6章「エチオピアの中心におけるマルクス主義的近代」は再び舞台を「中心」に移し、革命の進行過程において採用されたマルクス＝レーニン主義の内容に対して検討が加えられる。エチオピアにおけるマルクス主義は、ユートピアをもたす理念としてではなく、後進国にいかにして統一と富をもたすかについての物語として捉えられた。政治エリートたちは自らを国内の、とくに南部の〈後進性〉（backwardness）に対して優位にあるものとして捉え、そうした〈伝統的〉な人々を20世紀文化すなわち〈近代〉に参入させようとした。そのうえで第7

章「草の根革命」では、1980年代のマーレ社会において革命が受け入れられる過程でどのような社会変化がもたらされたのかが論じられる。

III

以下、本書の主要な論点を抽出してみよう。冒頭でも述べたように、本書の主題は〈近代〉である。しかしここで語られる〈近代〉は、エチオピアにおける自己表象としての〈後進性〉と対照されるところの、読み替えられた〈近代〉である。エチオピアにおいて、またマーレ社会において〈近代〉がどのように読みとられ、表象されたのか。それを読み解くために、本書はエチオピア正教と福音派という2つのキリスト教、そしてエチオピア・マルクス主義を論点に据える。

そもそも革命以前のハイレ＝セラシエ時代には、エチオピアのナショナリズムと結びついていたのはエチオピア正教会であった。後進地域では正教徒になることがすなわち支配民族アムハラ属性を獲得することと同義であり、それは同時に〈近代〉に一步近づくということをも意味した。このことは、エチオピア国内における民族間の文化の差が、発展の差として捉えられてきたことを示す（これはタンザニアなどにおける、いわゆる「アフリカ的社会主義」が、アフリカ性の回復と国家建設を同時に達成しようとしたのとは極めて異なる）。このことはしかし、マルクス主義から取り入れられた唯物論的な発展史観に基づくものでは決してない。それはエチオピアにおける、中心（アムハラと正教徒）による、周辺部（遅れた人々）にたいする文化・政治的なヘゲモニーの構造に根を持つのだが、残念ながら本書ではその点はあまり触れられていない。

他のアフリカ諸国において、西欧文明がキリスト教に付随する形で到来したのとは異なり、エチオピアにおいては、すでに存在したエチオピア独自のキリスト教と、北米からやってきた福音派とが存在したために、事情はいくぶん複雑である。SIMは、その発生の段階では、近代文明に対して批判的な立場をとる、一種ファンダメンタリスト的な布教活動を

援助する団体であった。本書が強調する点のひとつは、こうして北米的文脈において反〈近代〉的であったキリスト教が、エチオピアにおいては目指すべき〈近代〉のモデルとして受け入れられたという逆説である。たとえばSIMが布教への足がかりとして、そして現在でも行っている医療援助や学校建設、それに彼らが持ち込む自動車や飛行機といったあらゆる道具は、エチオピアの人々に対して〈近代〉を感じさせるに十分だったのである。

SIMのマーレ社会への影響はキリスト教的価値観を持ち込んだこと以上に、むしろ人々に〈近代〉とはどういうことなのかを強く意識させた点にある。たとえば教会の組織や月例会といったプロセスの導入、学校でのアムハラ語による教育などを通して、マーレのキリスト教徒たちは新しいアイデンティティを獲得していった。またアメリカ人駐在員の「豊かな」生活ぶりを見るにつけ、彼らの中にhealth and wealthの獲得という、決して神への帰依だけではない改宗へのモチベーションを提供することにもなった。

1980年代になって革命政府はエチオピア正教会を政権に取り込み、同時に「反革命的」であるという理由でミッションを国外へ追放した。これにともない、マーレのキリスト教徒たちは次第に福音派からレーニン主義へと「転向」をはかり、農業組合や行政に積極的に関わっていくのである。革命と国家の力は、農業組合や学校といった回路を伝って「草の根」の末端まで着実に浸透していった。マルクス主義と福音派キリスト教徒たちの思想には、〈後進性〉についての共通認識があったとダナムは分析する。それはエチオピアという国家そのものが諸外国に比べて遅れているうえに、マーレはそのエチオピアにおいてもさらに遅れた社会であるという認識である。学校教育を受けたのちに労働党員となり、アジスアベバの政治学校で学んだマーレの若者は、ハイレセラシエがいかに悪い政治を行ったか、ソ連スタイルの政治がいかにすばらしいかについて講義を受けた。党の綱領と聖書は彼らにとってパラレルであった。

他方でキリスト教徒ではない、伝統主義的な人々

は、新しい政府が王の復活を望んでいないことに気づくようになった。そのことはマーレ社会におけるキリスト教徒と非キリスト教徒との溝を深めたといえる。

IV

最後に本書の意義と、本書の後にどのような研究が可能かを考えてみよう。

本書の面白さはまず第1にMarxist Modernという表題に現われているといえよう。それは「マルクス主義的近代」でもないし、「マルクス主義の視角からの近代論」でもない。それはエチオピアにおける「マルクス主義が近代をもたらす」という金科玉条のことであり、それ自体がひとつの信仰の対象になってしまったモンスターである。実際、カール・マルクス主義を掲げた当時の政治エリートでさえ、マルクスのことはほとんど知らず、実態は「盲信」に近いものであったとダナムは述べている。そして本書が分析の対象とするのはイデオロギー化(～主義)してしまったマルクス主義という化け物の、社会学的な側面である。本書はそうしたMarxist Modernを「〈近代〉についてのメタ・ナラティブ」として提示しているが、同時に本書もまたエチオピアにおいて読み替えられた〈近代〉について、現地の脈絡で捉え直したひとつのメタ・ナラティブであるといえよう。その意味で本書は1990年代に多く発表された、冷戦時代を振り返る一連の書籍の系列に加えられるべきものである。

エチオピア社会主義政権に対するダナムの立場は明言されていないが、彼の批判的姿勢は本書全体を通じて鮮明である。たとえばマルカキスのように、社会主義政権下のエチオピアとは一切関わりを持たずに外部から批判を展開した研究者もいるが[Markakis and Waller 1986]、ダナムは政権に対する批判的姿勢は保ちつつも、なおマーレ社会においてフィールドワークを継続した。本書は様々な思想領域と接点を持つが、ダナムのこうした姿勢からは、やはり本書は人類学的な書物であるといわざるを得まい。

また評者のような、エチオピア南部を研究対象地

域とする者には、本書はあらゆる意味で貴重な成果である。まず本書は、社会主義政権期の事実関係についての入門書的一面をもっている。これは、評者のように1991年以降にエチオピアと関わるようになった者にとってはなおさらである。同時にエチオピア南部の歴史と国家に関わる貴重な情報を含んでいる点においても本書は恰好の参考文献となる。エチオピアはゲエズ語やアムハラ語の文字資料による歴史研究の盛んな国だが、南部の歴史は相変わらず歴史学者からそっぽを向かれたままである。ダナムの業績なくしては、南部の歴史のアウトラインすら知ることには難しい。

本書は学問分野としては、エチオピア研究および文化人類学の研究書であるが、随所に、そのどちらにも直接関係しない文献からの長めの引用がちりばめられている。たとえば革命と共産主義国家についての章には、中国やロシアそれにフランス革命に関する書物（『世界を揺るがした10日間』など）が引用され、ダナム自身の語りとの交響的なハーモニーを作り出している。こうした手法の積み重ねが、本書を思想的宇宙のなかのある一点に定位していくのである。

しかし、本書はそうした領域の広さゆえに、逆にすべての事項について完全に網羅しているわけではない。これは本書の弱点というよりはむしろ、今後の研究に向けて多くの問題系を具体的な形で開いたという点で評価すべきなのであろう。たとえば以下のような諸点が挙げられる。

本書で述べられる「進んだ社会」と「遅れた社会」についての認識は、アムハラ中心の帝国が築かれた時点から脈々と受け継がれてきた「伝統」である。それは本書で論点の中心に据えられた政治的側面や宗教・文化的側面からのみならず経済、あるいは人種をめぐる言説のなかにも見いだされるものである。エチオピアにおける〈後進性〉は、こうした複合的な観点から総合的に結論づけられなければならない。

さらに重要なのは、こうした〈後進性〉にまつわる言説を、当の「遅れている」と評価された側が受容し、それを自画像として提出してしまっている事実である。こうした一種の「敗北の語り」については今後ダナム自身や他の研究者が取り組んで行くべきであろう。

そのことと関係して、南部地方の政治勢力についての記述があっさりしすぎているのも気になる。中心と周辺相互関係という本書の枠組みは、それ自体たいへんに重要であるが、その次の段階としては、周辺における中心と周辺、すなわち地方の政治を動かしてきた政治勢力と現地民との関係をミクロに追究することが必要とされるはずである。現在の地方分権政策のもと、南部においても周辺の諸民族出身者が行政府に登用されるようになったが、その新理念の未来を占うためにも、またより広く国家と周辺民族の関係を精確に把握するためにも、そうした地方の政治勢力の研究が必要だろう。そうした今後の課題は、かなりの程度本書の枠組みの中で行われるはずである。

文献リスト

- Clapham, Christopher 1993. "How Many Ethnopolities?" *Africa* 63(1): 118-128.
- Donham, Donald L. 1985. *Work and Power in Maale, Ethiopia*. Ann Arbor, Mich.: UMI Research Press.
- 1990. *History, Power, Ideology: Central Issues in Marxism and Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Markakis, John and M. Waller eds. 1986. *Military Marxist Regimes in Africa*. London: Frank Cass.

(神奈川大学日本常民文化研究所研究員)